

團十郎の 歌舞伎案内

十二代目
市川團十郎
Ichikawa Danjuro

PHP
新書
519



PHP SHINSHO



PHP新書

PHP INTERFACE
http://www.php.co.jp/

市川團十郎(十二代目) [いちかわ・だんじゅうろう]

1946年東京都生まれ。歌舞伎役者。日本大学芸術学部卒業。十一代目團十郎の長男として、53年市川夏雄を名乗り歌舞伎座で初舞台。その後、六代目市川新之助、十代目市川海老蔵を襲名。そして85年、江戸歌舞伎最高位の名跡である十二代目市川團十郎を襲名。同年のアメ리카歌舞伎公演にも参加する。92年には初代團十郎が作・主演した『成田山分身不動』を290年ぶりに上演。急性前骨髄球性白血病のため入退院をくりかえすも、復帰後の2007年3月に歌舞伎公演としては初のパリ・オペラ座公演を成功させるなど、第一線で活躍を続ける。その功績が認められ、日本藝術院賞、名古屋演劇ペンクラブ年間賞、眞山青果賞大賞、芸術祭賞(演劇部門、優秀賞)、菊池寛賞、フランス芸術文化勲章など受賞歴は数知れず、07年4月には紫綬褒章を受章。(社)日本俳優協会財務理事、文化審議会委員を務める。

團十郎の歌舞伎案内

PHP新書519

二〇〇八年四月三十日 第一版第一刷

著者 ——— 市川團十郎(十二代目)

発行者 ——— 江口克彦

発行所 ——— PHP 研究所

東京本部 ——— 〒102-8331 千代田区三番町3-10

新書出版部 ☎ 03-3239-6298 (編集)

普及一部 ☎ 03-3239-6233 (販売)

京都本部 ——— 〒601-8411 京都市南区西九条北ノ内町11

組版 ——— 有限会社エヴリ・シンク

装幀者 ——— 芦澤泰偉・十見崎雅淑

印刷所 ——— 図書印刷株式会社

© Ichikawa Danjuro 2008. Printed in Japan

落丁・乱丁本の場合は弊社制作管理部 ☎ 03-3239-6226 へご連絡下さい。送料弊社負担にてお取り替えいたします。

ISBN978-4-569-69929-5

『助六由縁江戸楼』市團二郎(助六)





パリ・オペラ座での『勧進帳』
市川團十郎（并慶）、市川海老蔵（富樫）





昭和33年、自宅の庭で

團十郎の歌舞伎案内

十二代目
市川團十郎
Ichikawa Danjuro



PHP新書

はじめに

市川團十郎でございます。

江戸時代から先祖代々、歌舞伎の役者をいたしております。

最初に申し上げておきますと、團十郎の「團」の字は「団」ではございませんので、どうぞご注意ください。

でも当用漢字では「団十郎」と、こうなってしまうんです。昭和六十（一九八五）年、わたくしが市川海老蔵から十二代目團十郎を襲名するときに新聞記者の方々に、必ずこちらの「團」という字を使ってくれと頼んだのですが、「当用漢字にはないので使えない」のだそうです。ですから、いまでも新聞などでは「団十郎」なんですよ。

亡くなられた有名な作曲家の團伊玖磨^{だんいくま}先生も、この「團」なんです。「団伊玖磨」という宛名で封書が届くと絶対に開封しなかったとか。「俺宛てじゃあない」というお気持ちだったのでしょうか。

「団」でも間違いいはないのですが、わたくしの名前を書かれる場合は、ぜひともこちらの「團」でお願いいたします。

さて、平成十九（二〇〇七）年九月、わたくしは青山学院大学文学部の日本文学科客員教授として、「歌舞伎の伝統と美学」というテーマの集中講義をするご縁をいただきました。その際にお話ししたことをベースに、歌舞伎をはじめとする日本の芸能について日々わたくしが考えたり調べたりしたことを、今回このように一冊にまとめることができました。

じつは、わたくしも小学校から高校まで、青山学院で学んでいたんです。わたくしはじめて青山学院のキャンパスに通ったころとは、ずいぶん変わりました。学校も、青山という街の様子も。

そのころの青山は空き地ばかりでした。学校が終わると仲のいい友だちと道草です。あっちへ引っかかり、こっちへ引っかかりしながらうちへ帰っていく。空き地に隠れ家と称して、工事現場のいろいろな廃材をもってきては囲んで、東門組の連中と遊んでおりました。それが楽しみだった思い出がございますね。

当時、わたくしは麻布に住んでおりましたので、初等部への通学は東門をくぐる東門組。

渋谷から帰る子どもたちは西門組、正面の門から帰るのを正門組と呼んでおりました。

ですが、たとえ小学生でも、歌舞伎役者の家に生まれたおかげで、じつにいろいろな稽古事をしなければなりません。道草していると家の人が迎えに来て、「坊っちゃん」——いまはあんまり「坊っちゃん」なんて言葉は本人に使わないでしょうか——「坊っちゃん、だめですよ」って、襟首^{えりくび}をつかまれて、お稽古事に連れていかれたものです。

昔の日本の言い伝えに、六歳の六月の六日から稽古事をしはじめると、その芸事が上手になるというのがあります。これは世阿弥^{ぜあみ}のつくった能楽の理論書『風姿花伝^{ふうしかでん}』にある一節からきているんです。数えて七歳、いまの六歳の六月六日くらいから始めるとちょうどいい。それにならって、わたくしども歌舞伎役者の家でも、子どもたちは六歳の六月六日からお稽古に行きはじめるんです。

まず習うのが踊りです。日本舞踊。踊りで大事なものは、扇子と手ぬぐい。落語家も同じですね。これらは非常に便利な道具で、これだけでじつにさまざまなことを表現できる。

わたくしの扇子に入っているのは市川家の「三升^{みつす}」という表紋^{おもてもん}。それから「杏葉牡丹^{ぎようようはたん}」という替紋^{かえもん}です。そういう小道具を使いながら、人の心や情景などを表現していくんです。この扇子の使い方ひとつとっても、江戸時代の人たちの観察力、洞察力にはすごいものがある。

るなあをつくづく思います。

いま、日本の文化が世界的に認められつつありますよね。たとえば、和食文化の寿司が人気を集めているのも、日本人のもっている繊細さ、観察力の鋭さが評価されている表れだと思います。現代のわれわれは、江戸人たちのDNAを引き継いでいるんですね。

これからお話しする歌舞伎にも、そういうエッセンスがいっぱい入っております。

みなさんは今後、世界に出ていく機会が多くなると思います。わたくしどもも平成十九年の三月二十三日、パリのオペラ座で初の歌舞伎公演を開催させていただきました。その際に、商社をはじめいろいろな日本企業の方がいらしたけれども、こんなふうにおっしゃる方がじつに多かった。

「歌舞伎について何にも知らなかった。これはやっぱり恥ずかしいことだと痛切に感じました」

彼らにはたしかに語学力があります。とくに英語は社会人として大切なアイテムの一つではあります。ただ、日本人としてのアイデンティティ、つまり根本的な部分をしっかりとっていないと、いくら英語がしゃべれても意味がない……とは過言かもしれません。

ですが「日本の伝統芸能の歌舞伎とはこういうものですよ。西洋とくらべるとこういう違

「いがありますよ」くらいのことを、端的に語れて当然なのではあるまいか。日本人として、このユーラシア大陸のいちばん東の端の小さな列島に住むわれわれが考えて生み出してきたことには、よいところもあれば悪いところもある。そのよいところについてはぜひ勉強して、英語力というアイテムを使いながら、胸を張って披露していただければ、たいへん嬉しいことだと思っております。

グローバル化の時代、各地域の文化というものが、気がつかないうちにだんだん一つの方
向に進んでいるように思えます。インターネットはその最たるものでしょう。歌舞伎役者の
わたくしがネットでものを調べたり遊んだりしていますからね。そんな時代だからこそ、日
本の芸術や芸能がもっている、海外のものとはちよつと違う感性、それを大事にしてもらい
たいと思います。

また、ふだんまじめに一生懸命働いている人々のなかには、どこかにやつぱり息抜きとい
いますか、現実からちよつと逃れたいなという気持ちがあると思います。そうい
うときに、男性が女性を演じる女形おんながたの色気とか甘美さ、あるいはそこにいたる役者の努力
とか、そういうものが垣間見えたときに、これまで経験したことのないおもしろさを感じ
になるのではないでしょうか。

演劇には心の浄化作用がありますが、そのなかでも歌舞伎ならではのおもしろさを感じていただければ、そして歌舞伎が、ふだんの日常生活では満たされないことを満たしてくれる存在となればいいなと思います。

じつは、こんな考えにいたったのには理由がございます。

みなさんもお承知のように、わたくしは白血病という病気になりました。白血病になった有名人といえば、夏目雅子さん。残念ながらああの世に逝かれてしまわれました。K・1のアンディ・フグさん。彼はじつはわたくしと同じ型の白血病で、M3型というものなんです。

人間の細胞には、染色体が対になって四六本並んでおりますが、その一五番目と一七番目が似ているため、お互いを取り違えることがあるのだそうです。すると、そのM3型という白血病になる。骨髓のなかで造血幹細胞がリンパ球になったり、血小板になったり、白血球になったり、赤血球になったり、成長につれて変化していきますが、白血病の場合、その過程で白血球に異常が起きて未熟なものになってしまう。ふつうは、白血球は外敵と闘ってたがい死ぬんですけれども、死ななくなってしまう。死ななくてどんどんふえてしまうと、ほかの赤血球とか血小板に悪い影響を及ぼすというわけです。

平成十六（二〇〇四）年五月に、わたくしの^{せがれ}倅の市川海老蔵が——いろいろ世の中に話題

を振りまいて当惑しておりますけれども（笑）——十一代目市川海老蔵襲名の舞台のときに、わたくしはこの病のため、やむなく休演することになりました。でも、おかげさまでいまの医学はたいへん進んでいて、また運のいいことに、M3型の白血病によく効く薬が厚生労働省から認可されたんです。それで、なんとか一度は「寛解^{かんかい}」という状態になりました。でも「完治」ではないんです。

寛解。『広辞苑』（岩波書店）を調べると「症状が一時的あるいは永続的に軽減または消失」した状態だとあります。どういうことなのかいまだに疑問なのですが、その寛解の状態になり、その年の秋にフランスのシャイヨー宮で行われた市川海老蔵の襲名披露興行を、無事させることができました。

ですが翌年の平成十七（二〇〇五）年の夏に再発してしまいました。寛解と伝えられたときに「治る確率は六〇から七〇パーセント」といわれていたのですが、残りの三〇〜四〇パーセントのほうに入ってしまったことになります。

また入院です。すると、また新しい薬が認可されておりました。それがなんと砒素^{ひそ}を土台にした薬なんです。砒素って猛毒ですよ。要するに「毒」をもって制していく。その毒でなんとかまた治すことができたのです。

みなさんには縁のない病気であることを願います。

わたくしも最初は風邪かなあと思っておりまして。でもなかなか治らない。微熱がずっと続く。ぶつけた覚えがないのにアザができるんですよ。だんだん大きなアザになって治らない。白血病の「は」の字も知らなかったものですから、ずっと倅の襲名の舞台で『勸進帳』の弁慶を演じておりました。もともとたいへんハードな役なんですけど、どんどん息が苦しくなってきた、初日が開いて九日目にお医者さんに診てもらったところ、白血病の宣告をされたのです。

いまでこそ簡単にスラッと語っておりますが、命にかかわる病気を患ったわけですから……それはもう言葉では表せないつらいものでした。でも人間は忘れやすいもので、いまではケロッとしております。

ただ、その苦しみのなかでひたすら考えたのは、「自分の体のなかには六〇兆の細胞がいるのだ」ということ。みんな自分ひとりで立派に生きていると思っただろうけれど、じつは六〇兆もの細胞が一人ひとりを生かそうと一生懸命に働いたり、それぞれの役目を終えれば死んでいったり。それをくりかえしながら「自分」という存在を維持している。

この本を読んでくださっているみなさんも、いろいろな壁にぶつかったり、自分とは何か

と考えたときに、髪の毛一本、爪、歯にいたるまで、何億という細胞が一生懸命に自分という存在を生かそうとしているのだと思ってみてください。そうするとまた人生観が変わるかもしれないですよ。

いやいや、べつに変わらなくてもいいんですよ、人生観なんて。ただ、われわれの住んでいる銀河系の恒星の数こうせいが約二〇〇〇億個といわれておりますが、それよりはるかに多くの細胞がわれわれの体のなかでわれわれを支えている。このことはやはり驚くべきことですよ。ところが、先日また驚かされました。聖路加国際病院の理事長をなさっている日野原重明さんとお話する機会があったのですが、みなさん、この方はいくつだと思えます？

九十六歳ですよ。ちなみに、わたくしは六十一歳です。この九十六がじつにしっかりといる。わたくしも役者という商売をやっておりますから台詞は一生懸命に頭に入れますが、この九十六のおじいさんが、いちいちすごい記憶力なんです。びっくりいたしました。

日野原さんがおっしゃるには、「私はかつて高校生に授業をしたことがある。命とは何だろうとみんなに聞いたけど、だれも答えられなかった」と。

「命っていうのはね、時間を与えられたということなんだよ」と日野原さんはおっしゃいました。